

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者 保坂高殿

保坂高殿（ほさか たかや）氏の博士学位申請論文（乙種いわゆる論文博士）に関する審査委員会は7月14日、14号館706会議室で開催された。

論文『ローマ帝政中期国家と教会：キリスト教迫害史研究 193-311年』はキリスト教が成立した帝政初期から大迫害の終了が宣言された311年にいたる時期の帝国と教会との関係をめぐって、教会側の視座から迫害史として叙述するのではなく、帝国側の視座に立ち宗教政策史として、文献、碑文、図像、貨幣などを詳細に検討しつつ叙述することを目的とするとの説明を受け、各委員より質問があった。

「キリスト教の普及」は「多神教世界から一神教世界への転換」であり、世界史上の最大級の問題のひとつである。それをめぐる問題を解明しようとするのが本論文であり、これはすでに公刊され600頁を超える大著であり、わが国では比類なく広く深く検討した本格的な研究書であると高く評価された。

被害者（という意識でいる）側（＝キリスト教会）からのみ語られがちな「迫害史」を加害者（と見なされる）側（＝ローマ帝国）からながめればどうなるか、という一貫した観点から描かれた「新しい歴史像」に目をむけた慧眼には先駆的な意味がある。その新機軸のひとつは、現代風の表現で言えば「キリスト教へのハラスメント」の歴史として捉え、公平な立場で分析している点にあるとの指摘があった。というのも、加害者にその意志・意図もなかったのに、被害者はこのうえなくトラウマを蒙ったと主張しているのだから。現代社会ではことさら被害者の「意識」を問題にする傾向にあるから、その観点からしてもやはりローマ帝国は加害者の謗りをまぬがれない。それでも、その立場の言い分も十分にふまえて事態に迫るといふ公平な視座の転換には好感を感じさせるものがあった。

また、夥しい史料群をほとんど網羅的といえるほど渉獵して論理的整合性を追及した点には余人の追随を許さない力量で迫るものがある。それについては大方の審査委員が敬意を表した。この分野は欧米のキリスト教世界の学界のなかでは古くから研究されつくしたとの印象もある。しかし、それらは個々別々のテーマについてであり、それらの基本的なテーマについて本書ほど徹底的・網羅的に論拠にあたって分析した研究はまれである。すでに学士院賞を授与された前著『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』（参考文献として提出済）と合せると国際的にも皆無と言えるほどの大作である。しかも、その議論は大筋においてきわめて整合的であり、説得的であったと判断されている。

しかし、問題点がないわけではない。ひとつには民族概念の曖昧さがあげられ、宗教集団を民族とよぶことへの疑問が出された。また、教父の考え方がどのようにして信徒に届くのかというような指導者と俗人信徒との関係が必ずしも解明されてはいないとの指摘もあった。さらに、地中海世界一般ではなく、地理的な多様性についてももう少し考慮すべ

きではないかとの指摘もなされた。また、「恣意的で横暴な民衆」と「理性的で温情のある国家」という二項対立図式のような記述が散見され、そこには国家と民衆をめぐる歴史学の共通認識からすればいくらか短絡的すぎるとの批判もなかったわけではない。

だが、それらの疑問はあるにしても、それらは本論文の全体的評価をいささかも損なうものではないということにおいては、審査委員すべてが一致して認めるところであった。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。